



東海と席卷した戦国大名 今川家の家督争い、花倉の乱

今川義元

今川氏親の5男で、母は寿桂尼。花倉の乱直前まで、出家しており梅岳承芳と名乗る。家督相続後は、領国経営、軍事ですぐれた手腕を発揮し、今川家の全盛時代を築く。写真 アフロ



出家していた2人の兄弟を それぞれの勢力が担ぎ出す

將軍家・足利氏の有力な氏族である今川氏は、守護大名から戦国大名になった希有な氏族である。だが、いつの時代にも一門衆と有力家臣団との抗争があり、今川家も例外ではなかった。この家内抗争を仲介して収めたのが、小田原・後北条氏の祖になる北条早雲であった。早雲の仲介で今川の駿河守護と家督を相続した氏親は、家中をまとめ上げると同

時に遠江守護にも補任された。さらに氏親は検地を実施し、分国法を制定する。すべて平仮名で書かれており「今川仮名目録」と呼ばれる。氏親は正室として京都の公家・中御門宣胤の娘を娶った。後に「尼御台」と呼ばれる女性・寿桂尼である。寿桂尼は男女3人ずつの子を産む。男児は嫡男・氏輝、次男・彦五郎、4男・方菊丸（義元）である。しかし、氏親には側室に生ませた

男児が3人いた。3男・良真（玄広惠探）らは、今川家の重臣で遠江土方城主（後の高天神城）福島上総介正成の妹が母である。義元が生まれた頃、駿河・庵原郡出身で、京都・建仁寺で修行を続けている僧・九英承菊（後の太原崇雪斎）がいた。この雪斎が氏親没後に寿桂尼と二人三脚のようにして、義元の今川家を支えることになる。義元は、永正16年（1519）生まれ。兄の氏輝とは6歳、彦五郎とは4歳、妾腹の玄広惠探とは2歳の年齢差があった。ゆえに義元の今川家継承順位は低い。そこで、寿桂尼は大永3年（1523）の晩秋、雪斎を京都から呼び寄せて義元の師匠に据えた。義元は、富士郡瀬古の善得寺に僧として入った。義元は僧名「梅岳承芳」となった。そして、3年後の大永6年6月、父親の氏親が病没した。

腹違いの兄に当たる玄広惠探は、義元同様藤枝・花倉にある律宗の遍照光院（遍照寺）に入っていた。家督を継いだ氏輝はまだ14歳である。有力な家臣団から誰かが後見人になると思われた。しかし、寿桂尼はこれを否定し、自らが後見人として立つと宣言した。「尼御台」「女戦国大名」の誕生である。寿桂尼は、なまじ誰かが後見人となれば勢力争いや内訌の元になる、と考えての決意であった。寿桂尼の寄って立つものが、氏親が残した「今川仮名目録」である。この33カ条を基本

花倉の乱 対立関係図



寿桂尼

氏親の正室で夫の死後、幼子、さらに孫を盛りたて、今川家の存続に生涯をかけた。「駿府の尼御台」とも呼ばれた。正林寺蔵



太原雪齋

花倉の乱で義元（梅岳承芳）を支持し、勝利に導いた立役者のひとり。後に軍事、外交、内政など、今川義元のブレーンとして活躍する。「黒衣の宰相」の異名も。臨濟寺蔵

に据えて今川家を取り仕切るというのである。雪齋も、これには協力する腹づもりがあった。

突然、氏輝・彦五郎の兄弟が死亡したのは、天文5年（1536）3月17日のことであった。氏輝には妻も子もない。いずれにしても氏輝の後継を巡り、今川家が慌ただしくなっていくことは明らかであった。

今川家の一大事に寿桂尼は、氏親の正式な血統を残すためにも義元（この時点では梅岳承芳）を選俗させて今川の家督を継がせたい、と希望した。それは、雪齋にもよく分かっていた。いち早く將軍家（12代・足利義晴）に嘆願書を出して義元の家督相続を申し出た寿桂尼と雪齋に、將軍家から許可があり、義元には將軍の「諱・義」が与えられた。しかし、福島一族は承知しない。

「今川家の嫡男・次男が同時に死亡してしまつた以上、継承順位は3男である玄広惠探にあるはずだ」というのが、その主張であった。正室に生まれたかどうか、側室の腹から出たかどうかではなく、あくまでも兄である惠探の方が義元よりも継承可能性は高いというのである。しかも後押しをする福島一族は、家柄も良く、今川家にとつても重臣であり、遠州という地域をまとめ上げている豪族としても大きな存在であった。

義元の「軍師」を意識した雪齋は、手始めの仕事として隣国の武田（信虎・北条（氏綱）両家との取り込み・支持を取り付けた。もし今川家に内訌が起きれば、武田も北条も内政干渉か侵略を企てるに違ひなかった。そこで雪齋は、福島一族以上に恐ろしい敵になる筈の武田・北条氏に対して手を打つたのである。両家ともに今川家は敵対してきたが、代替わりを理由に雪齋は「援助・救助」を申し入れたのだ。

氏綱の嫡男・氏康には寿桂尼の娘である義元の姉が嫁いでいたから北



玄広惠探の墓所

花倉城に攻め寄せる梅岳承芳（今川義元）の大軍を支えきれず、城を落ちた惠探は、普門寺に逃れここで自刃する。写真 藤枝市郷土博物館・文学館

条の取り込みは比較的に楽だった。雪齋は「秘策」を胸に、武田との交渉に当たった。「秘策」とは、内訌後には武田家から義元の妻を迎えるという婚姻同盟である。

義元には、朝比奈氏・岡部氏・三浦氏・瀬名氏・由比氏など今川家の有力家臣団が味方した。惠探には福島一族のすべてと駿河西部の斎藤氏・内野氏、山東部からは安西氏・井手氏など、さらに遠江の篠原氏などが付いた。これにより、今川氏をほぼ二分する内訌に発展したのである。内訌は後に、惠探が拠点とした藤枝・花倉城（別名・葉梨城）の名を取って「花倉（蔵）の乱」と呼ぶ。惠探も花倉城に入った。惠探側の城には、焼津・方ノ方城、丸子城、駿河に近い久能山城などもあった。情勢は五分五分というよりも、どちらかといえば惠探側に有利といえた。だが、義元側にも吉報が入る。北条氏はもちろん、武田氏が義元に味方するという連絡があったのだ。

雪齋などの意気は一気に上がった。北条の援軍5000人が到着すると、敵側から味方に寝返る者も現れた。次第に義元側が押し切っていた。

そして6月10日、最後の決戦となった。方ノ方城攻撃と同時に、義元側は北条勢の一部を含む1万の兵力で花倉城に攻め掛かった。その日の夕刻までに花倉城は落ち、惠探は城を脱出したが、逃げ切れずに瀬戸谷の普門寺で自刃した。義元は、今川家の当主としての立場を確立した。この後も太原崇孚雪齋は、義元の軍師・政治顧問として今川家を指導し、寿桂尼は今川家の精神的な支柱として義元を補佐するのである。

後日談がある。遠江・駿河から逃れた福島一族の残党は、以前から懇意にしていた甲斐の前島一族を頼った。これを知った武田信虎は、前島一族を誅殺した。この内訌がきっかけで、後に「善得寺の会盟」といわれる「甲相駿・三国同盟」の締結に繋がることになる。



花倉城跡

玄広惠探の拠点となった花倉城跡。戦国初期の典型的な山城で、現在も土塁などの遺構が残る。

写真 藤枝市郷土博物館・文学館